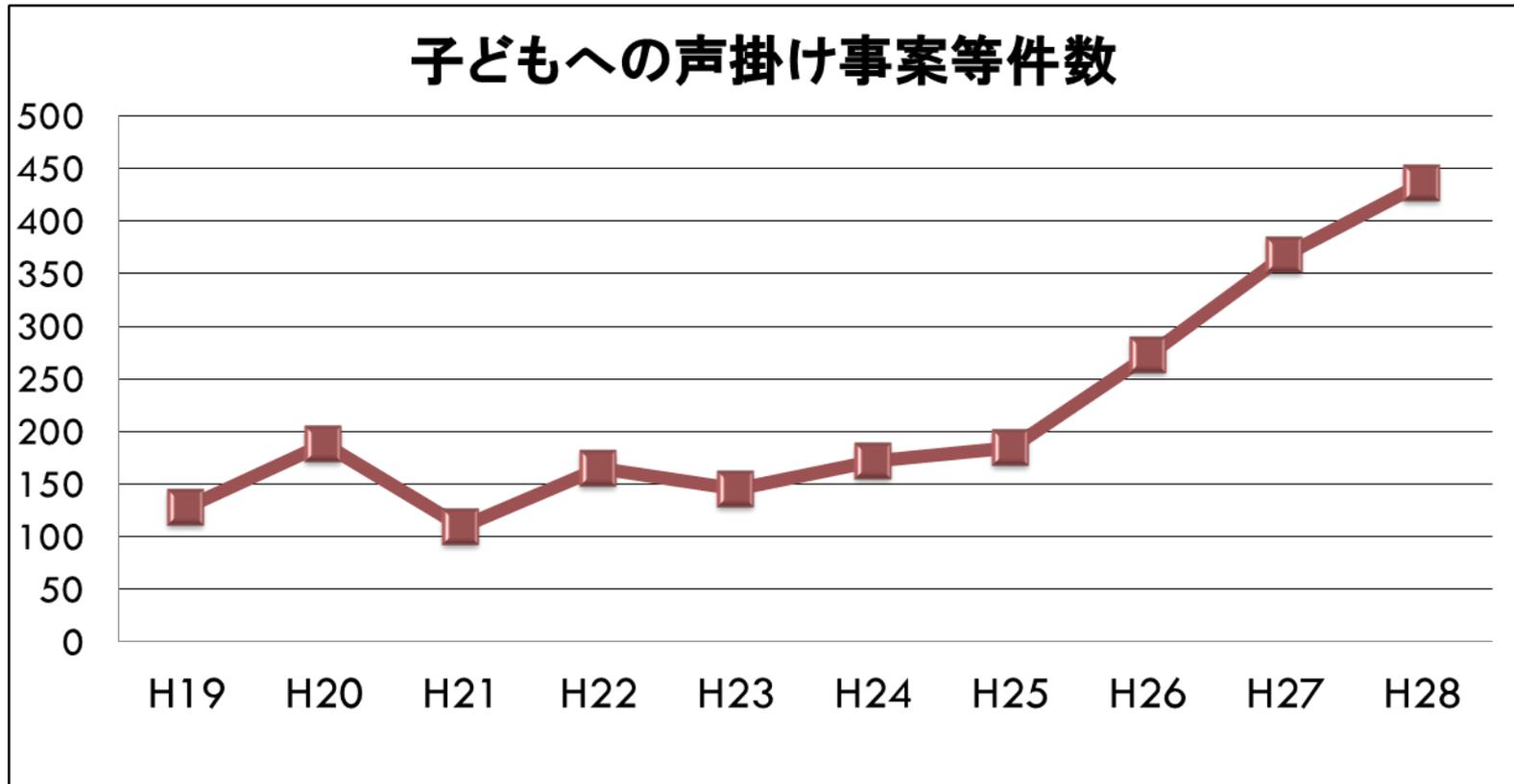


子どもの安全確保について

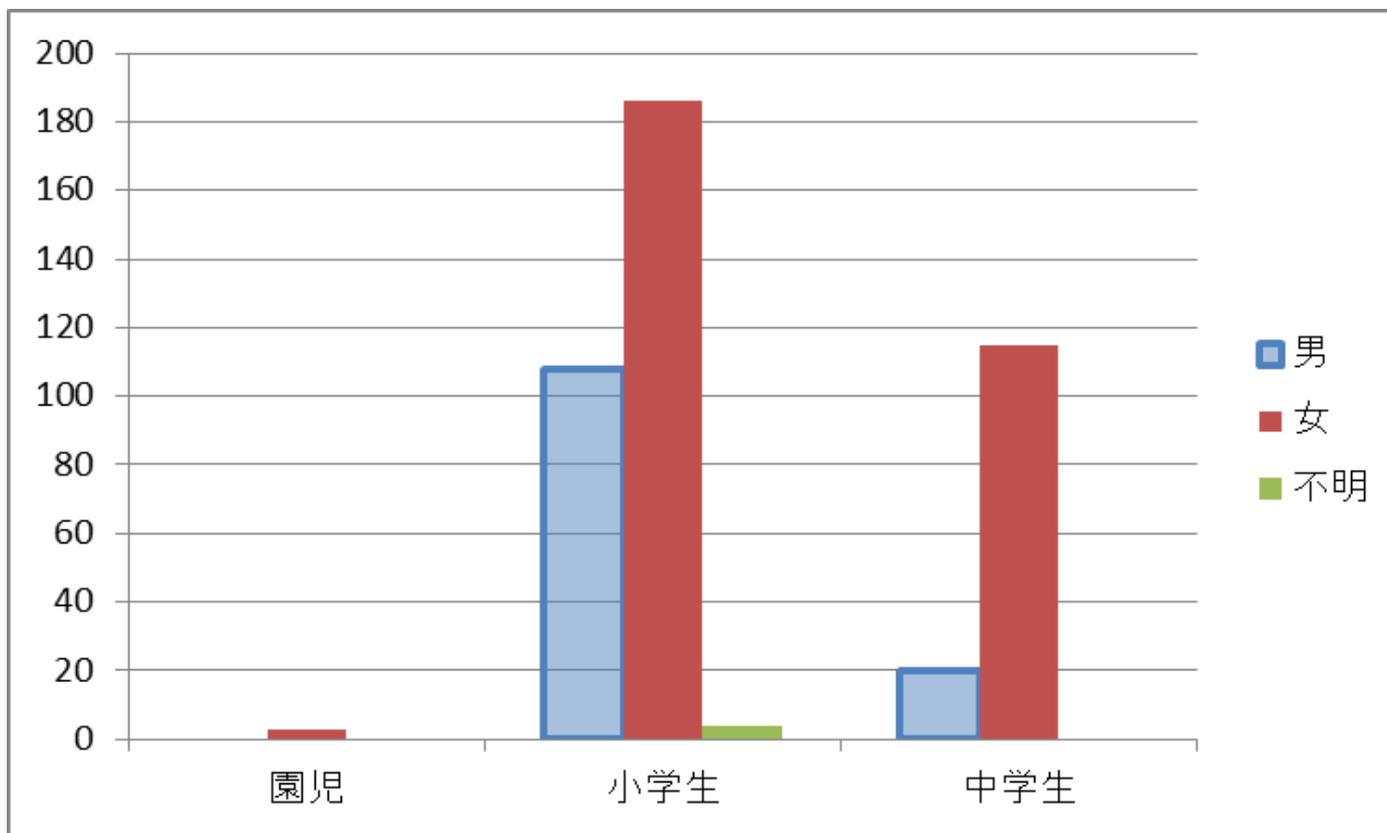
- 1 子どもへの声掛け事案等の状況
- 2 現在の取組
- 3 課題と対応
- 4 今後の取組等

1 子どもへの声掛け事案等の状況

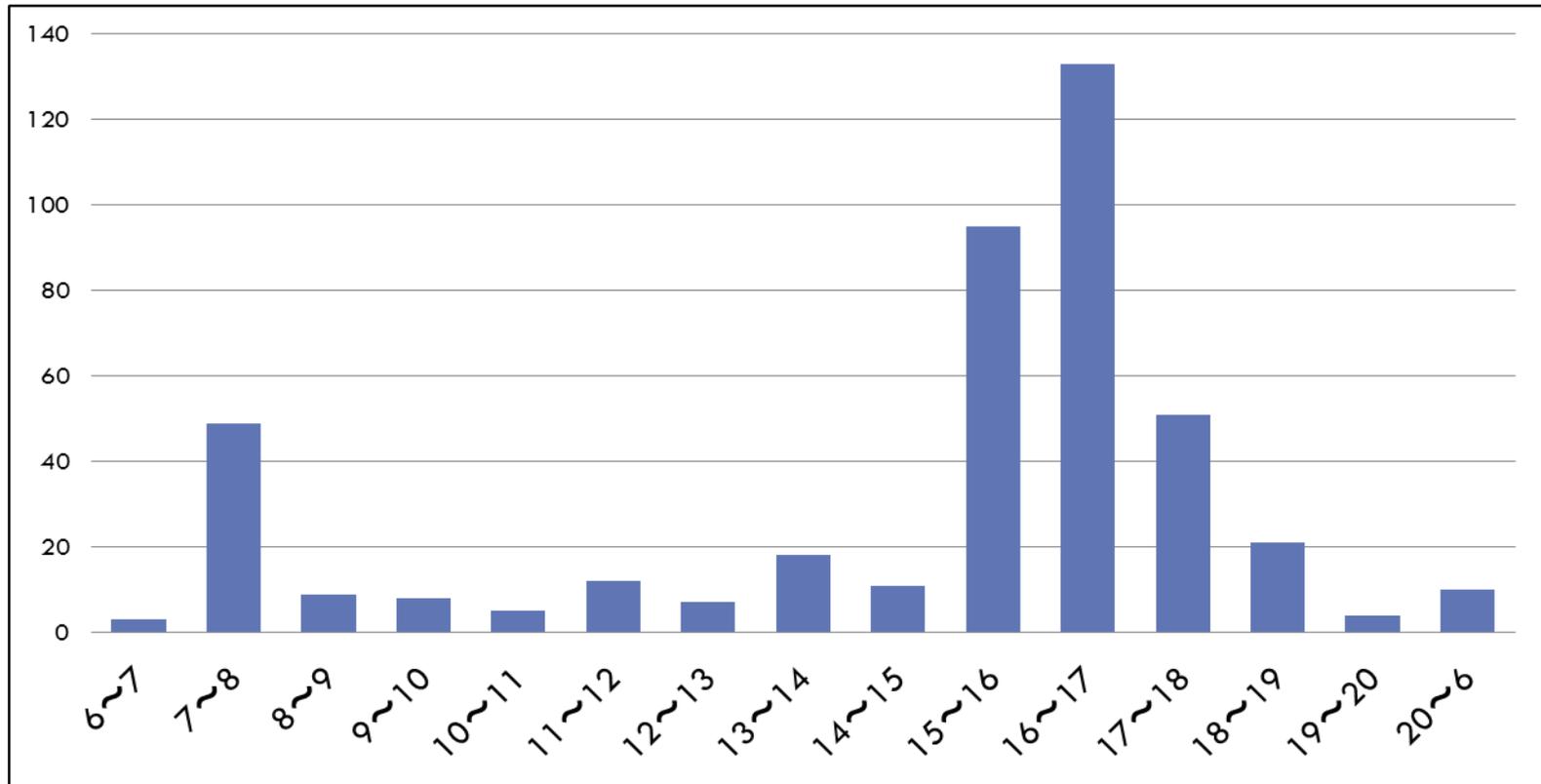
(1) 県内の子どもへの声掛け事案等件数の推移



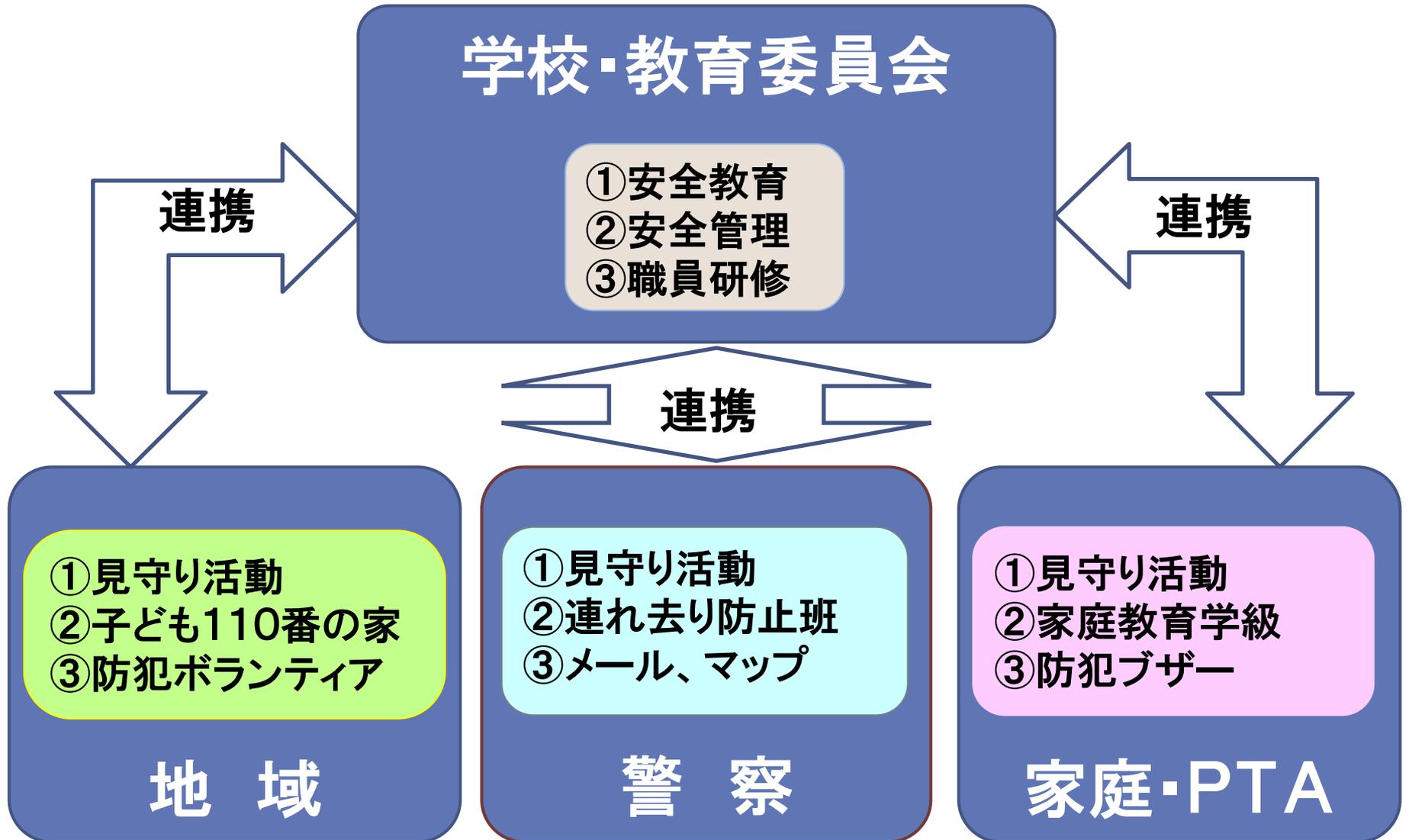
(2) 平成28年度における校種別・男女別件数



(3) 平成28年度における時間帯別件数



2 現在の取組



(1) 学校・教育委員会

①安全教育

- ・交通安全教室、防犯教室等

②安全管理

- ・集団登下校等の実施 94.6%
- ・学校と防犯ボランティアとの情報共有

③職員研修

- ・学校安全講習会等の実施

(2) 地域

①見守り活動

- ・防災ボランティア団体等による見守り活動

②子ども110番の家

- ・子どもが不安を感じた時、駆け込める住宅や店舗
- ・H27. 3現在、20, 698カ所

③防犯ボランティア団体等の登録

- ・防災ボランティア団体 406団体
- ・フレンドリー企業 174社

(参考)防犯ボランティア団体による活動例

朝日大学「めぐる」 瑞穂市

○法学部の大学生による地域の見
守りボランティア。会員数約50名。

- ・青パト巡回、下校見守り
- ・空き家の確認、通学路点検

NPO法人「こども見守り隊」垂井町

○会員約100名。退職世代が中心
(平均67歳)

- ・青パト巡回、下校見守り
- ・子ども110番の家逃げ込み訓練、
防犯手作りカルタ等
- ・4月に対面式を行い子ども、教職
員に顔見せ、警察とも連携

※青パト巡回 青色の回転灯を装備した自動車(青パト)を用いて行われる防犯パトロール

(3) 警察

①学校・通学路等における警戒・見守り活動

- ・制服警察官による「見せる警戒活動」

②連れ去り事案未然防止教育班「たんぽぽ」の活動

- ・連れ去り防止の標語「セーフティファイブ」の普及
- ・紙芝居、寸劇、腹話術や参加・体験型活動による啓発

※セーフティファイブ

一人にならない、ついて行かない、
大声を出す、近づかない、話をする

③安全・安心メール、犯罪発生マップ

- ・H29安全・安心マップ推進事業

(北方小、「めぐる」と連携)

- ・県民への情報発信

(4) 家庭・PTA

①見守り活動

- ・保護者等による同伴、見守り等

②家庭教育学級

- ・家庭教育について保護者自らが学ぶ場
- ・各校のPTAが運営

③防犯ブザーの携行

- ・小学校の86% 中学校の2%が携行(H28県教委調べ)

(5) 防犯ブザーについて

携行率 小学校 86% 中学校 2%

小学校

- ・ PTAや市町村の防犯協会等が入学時に配付
- ・ 中学年以降は携行しなくなる

中学校

- ・ 飛騨市と中津川市の一部の学校のみ携行

防犯ブザーの保守状況等

- ① 配付される防犯ブザーは定価1,500円程度が一般的。
まとめて購入により、620円程度になるケースも。
- ② 平均3年使用している家庭のうち、
電池交換をしたことがない保護者 75% <H25国民生活センター調べ>
- ③ 電池の寿命 0.5~1年程度<メーカー>

3 課題と対応

(1) 時間帯と見守り体制

- 夕方は下校・帰宅後ともに少人数・単独での行動が多い
- 夕方は防犯ボランティアも手薄

- ① 夕方の路上での見守り、青パト巡回を強化
- ② 危険個所等に防犯カメラを設置

(2) 情報共有

○ 防犯情報の活用・共有とさらなる活用

③ 「犯罪発生マップ」を学校で活用

④ 「安全・安心メール」等の受信登録促進と
重要情報の地域での共有

○ ボランティア同士の信頼性の向上

⑤ ボランティア同士の顔の見える関係づくり

⑥ ボランティアツール(ベストや腕章等)の適正管理

⑦ 見守り活動の複数単位での実施

(3) 最後は、自分の身は自分で守る

○自分で自分の身を守る術(セーフティファイブ等)の定着

⑧ 学校・家庭で繰り返し指導

○学年が上がるにつれて低下する防犯ブザーの携行

**⑨ すべての小中学生に防犯ブザーの携行を促進
定期的な電池交換・動作確認を徹底**

4 今後の取組等

○前項①～⑨について、次により依頼

- ・県教育委員会 → 学校、市町村教育委員会
学校安全講習会(5～6月)、保健安全講習会(7月)
- ・県 → 市町村、防犯ボランティア、警察
地域連携会議(10～11月)

○フォローアップ

- ・取組状況調査の実施(12月 県教育委員会)
- ・優良な取組事例の紹介